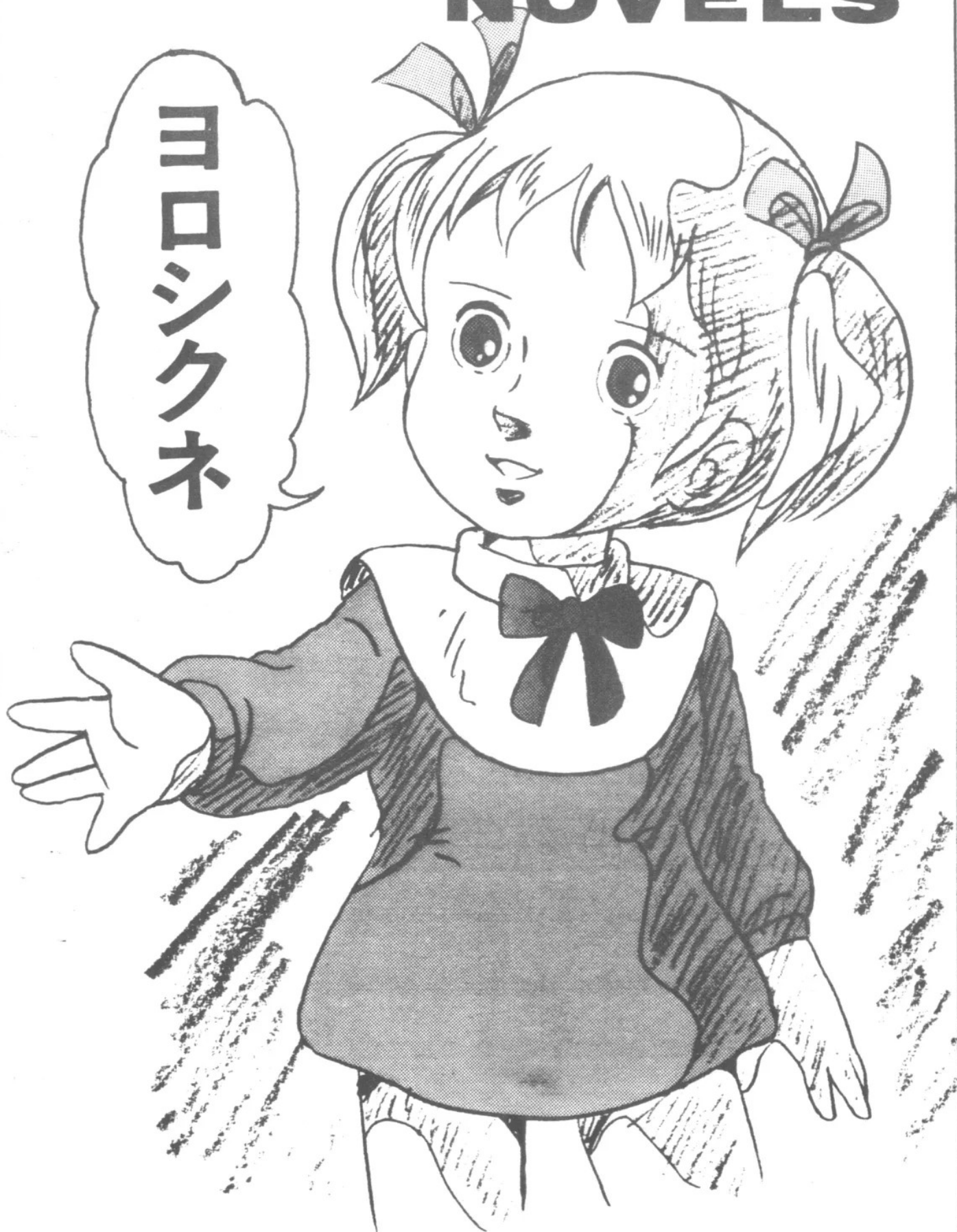


HUMBERT
NOVELS

HUMBERT NOVELS

ヨロシクネ



もくじ

中表紙：沈黙月

白坂一美

エタニティ レスト：5

米塚進也♡

進くん体験記：12

変態医大生A

結婚ごっこ：17
カット：しゅう・あいほう

聖羅伶

雪絵あるいは恋人：26

沈黙月

夏への花：32

庫裏嶋静馬

越馬：34

イラスト

タラコ：11

しゅう・あいほう：16

あおきさみ：31



エタニティ レスト (休息の代価)

白坂 一美

N88番惑星はほとんどが海であった。地球より一周り小さい惑星にただ一つの陸地である、パラダイス島が浮かんでいた。この亜熱帯気候の周囲128km程のなんでもない島は、探査隊による命名はシーランゲッジ島というもののだそうだが、パスカル研究所が惑星ごと領有するようになった。それから、いつしかパラダイス島と呼ばれるようになった。

人類が本格的に宇宙に乗り出してから、かれこれ二百年近かった。しかしその間、ルウム戦役、ガリア戦争といった、大小の戦闘が宇宙を舞台におこっていた。

こんな時は性風俗が保守化して、人間はつつましくかになる、と、いつていた昔の文化人類学者の言葉は正しく、今や女性優位のこの世においては、男たちのアニメは圧迫される一方であった。

私もせこせこ働きながら、独身のまま心のどこかに本能的欲求不満を抱きつづけていた。そして、そんなある時、私はパラダイス島の噂を耳にした。

N88番惑星のパスカル研究所では、遺伝子操作の研究をしているらしいが、裏では各地の美少女の細胞をあら

ゆる手段で入手し、そのコピーを島内で生活させ、研究所の唯一で最高のなぐさみものにしていくらしい。

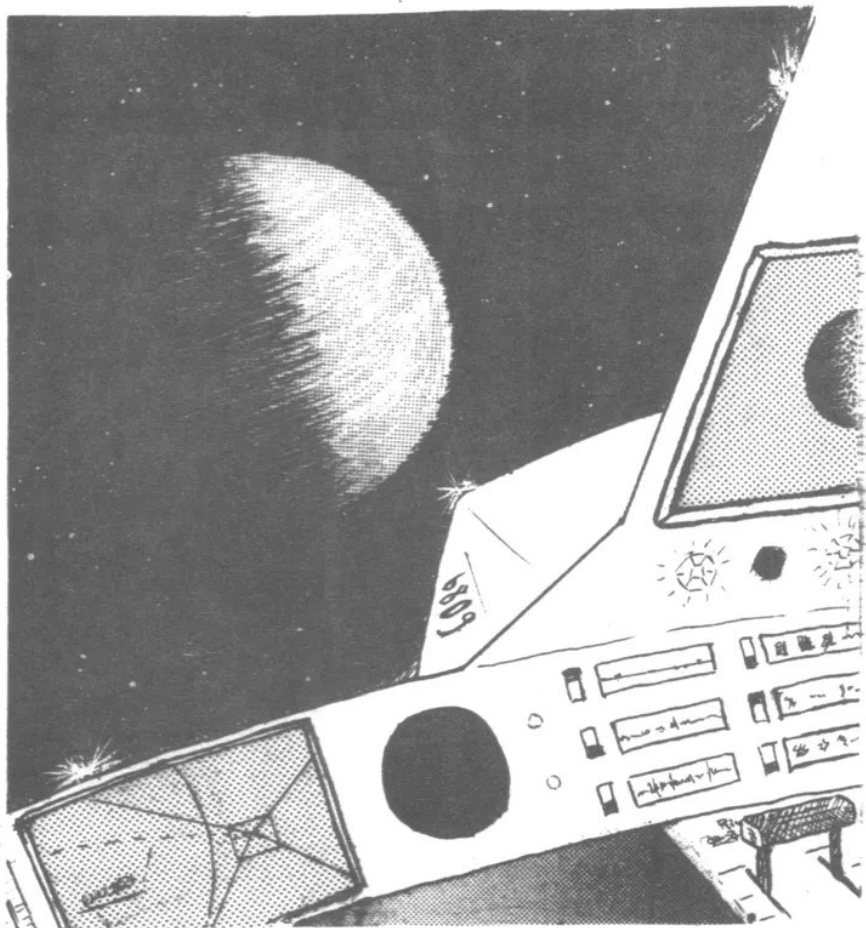
そんな噂が研究員の間に流れた時、辺りで待遇が悪いと誰も行かなくなった。ここへ、大量の優秀な男子研究員が流れ込んだ。その後バツクのオーメ財団から圧力がかかったのか、資金不足からか、寄附をとって期限付きで、一般人を島に入れる事にした。

寄附といっても、口止め料といった感じで、初めは一千万クレジットと、並の人では作れない額が要求されたらしい。それでも、金持ち政財界要人を中心に希望者は絶えなかった。

中には政府高官もいたりして、本能的欲求の強さを感じさせるとともに、財政的に人脈的にも大きな植民星以上となり、今や聖域の観を呈していた。

その後、どういうわけか寄附額が百万クレジットに下がり、一般人も十五年もまっとうに働くか、大きな密輸を成功させるか(といっても、成功率は低いのだが)すればとどく額になった。

私ももちろんこの情報を聞いた時から、このためにだけ生きているといっても過言ではないような状態になった。そして、十二年間コンピュータコアブロックの製造、販売を地道に(時には悪い事もやったが)続け、今、念願の120万クレジット(旅費が入っている)を手にし、N88番惑星でチャーターした個人用宇宙船で、パラダイス島に向かっていた。



「これで契約は成立しました。それでは寄附をこちらへ。」
 私は、研究所の事務係官に金の入ったバッグを渡した。
 「それでは金額の確認等を済ませる間に、説明など致しますので、こちらへどうぞ。」
 私は手術用ベッドの置いてある、明るいうちに部屋に連れて来られた。
 「先程申し上げました通り、島内生活についてこの説明をします間に、緊急信号発信機を取りつけさせて致します。ドクター、お願いします。」

人のよさそうなドクターが来て、あっという間に小さな、その機械を、取りつけた。その間際の係官が、島内生活やこの機械の説明をしていた。

「じゃあ、又お会いできる事を祈ってます。」

とドクターに言われて、

「ハァ」

と変な声を出したので、

「いや、この部屋に戻ってくる人、少ないんでネ。まあ、せっかくこの島にいらっしやっただ。大いに楽しんできて下さい。」

ドクターに別れを告げ、与えられた必要物資を持って、私は36日間極楽の旅に出た。

「ねエ、おじちゃんおなかすいた。ねエ、おきていっしよにとりに行こうよ。」

私はその声で目を覚ました。

「ルナ、おなかすいちゃった。海へいって魚をとってくる。」

私は微笑みながら、

「ぼくのとお願いな。」

というと、振り向いてにっこり笑い、浜辺へと長い黒髪をゆらしながら、走っていった。

このルナちゃんという10歳位で、白い肌で小柄であるが健康そうな美少女と出会ってから、そろそろ10日になるだろうか。

私はこの島の生活を初めた当初、探険と乱交に明け暮れていた。しかしそれもあきかけた頃に、このルナという少女に出会った。一目惚れだった。いさゝかあったが、今ではおごりだ。とうとうやむ程の夫婦である。

「とってきただけ、アホ男一つしかなかったの。」

その声にうとうとしていた私は、又ゆっくりと起き上がり、ルナをひざの上に抱いて、

「いいよ、それ大きいから二人で分けて食べようネ。」

石で殻を割り、生のまま二人で小枝でさして食べた。

とても腹の足しになる量ではなかった。ルナの物欲しそうな顔を見て、

「よし、今日はエルドナ狩りをして遊ぼう。」

「フーイ。ねエ早くつかまえてね。ね？」

私たちはエルドナというパスカル研究所が作り出した（のだらう）丸っこくてシンドバッドみたいな、しかし非常においしいこの小動物を捕まえて、森へ入っていた。

このエルドナをつかまえるためのワナは、島めぐりをしている時、偶然に出会った他の男から教えてもらったものだ。偶然といっても、この島に最大5人の男が住ん

でいるんだから、もつと会ってもよさそうなものだが、今の所彼と、乱交中に会ったやつぐらいで、後は何度か人影を見た事があるだけだった。

「わあ、かかった。……こら動くな、おとなしくなさい。わーん、ねエつかまえてよ。」

ちよつと少女の手にはあまる程のエルドナを、私は両手でワシづかみにすると、鍋の方へ持っていった。

「火の用意は？」

「できてる。」

私はエルドナをルナの見えない所で殺し、適当な大きさに切りさざみ、鍋に入れた。

ルナたち原住民は、果実、魚貝、そしてこのエルドナなどを食べるようにしつけられている。

5歳ぐらいまでは、島内二、三ヶ所で共同生活を営み、研究所員が世話をしていた。そしてその間に、生活に必要な事、訪問者に危害を与えないようにする事などを、獲得形質遺伝法とか潜在学習法とかいう方法で、（私にはよく分からない）教えていた。

一応一人で生活ができるようになると、識別リングをつけられて、島内に分散する。そして私たち訪問者の相手をするのである。

「もう煮えたかな？」

「もういいみたいだ。じゃあ食べようか。」
「うん。」

まるでおまきごとであるが、私たち二人のれっぎとした朝食兼昼食である。

「ねえ知ってる？夢幻樹の実をいっしょに煮ると、おいしいんだって。今度やってみようよ。」

「そんな事、誰に習った。」

思わずきつい口調で言ったため、ルナは泣き顔になって、「エリちゃんにさいたの。エリちゃん前の人といっしょだった時に……。」

「ごめんね。わかったから……もういいよ。」

彼女を抱きあげて、近くの草むらの上に横たえた。



涙をそっとふいてあげ、島の子が着ているワンピースみたいな服を脱かせ、例のごとくはじめた。

この島は気候調節されているのか、もともとなのかほぼ一年中温暖でこれといった気象変化のない、マリネラのような所であった。

島の子たちの着ているこの服は、研究所製であり、半袖のワンピース型で、機能性に富んでいた。そして、少女ごとに服の色、微妙なデザインなどが違っており、フェイスストはもとより万人に好かれるように作られていた(ちなみにルナは淡い水色の服である。)

ルナたちは巣立ちの時にそれを着せられるのであるが、この時にはもうなんとか、普通人と交わる事ができるといのは、研究所のなせる技であるうか。

「うーん……。」

「ルナ……起きて……。」

行為を終えると、煮すぎたグチャグチャになったエルドナを二人で食べた。

もうルナと別れる事など、考える事さえできなかった。もう他の子を見ても、襲わなくなった。それ程までにルナを愛していた。ルナが私の全存在であった。そしてそれはルナにとっても同じであるう。

しかし、それがもう長くは続かない事は、わかっている。

「ピー・ピー・ピー」

いつものぬぐらで、二人で抱きあって寝ていた時に、突然何かが鳴り出した。

「今日が最終日です。21時間以内に研究所事務所迄、いっしょって下さい。いっしょじゃない場合は契約により、あなたを爆破致します。」

あのドクターにつけられたへ緊急信号発信機が、ついに悪魔の時を告げた。

私は死刑よりむごいカンタン刑を告げられた被告のように、困乱し何が何だかわからなくなっていました。その時、ルナがゆっくり起き上がり、うるんだ瞳でこちらを見た。

「聞いたのか？」

彼女は軽くうなずいた。

「今日は思いっ切り遊ぼう。ネッ！」

空気を出したものの、気分はどうしようもなかった。私は、何も言わないルナを見るとどうしようもなくなつて、ルナを押し倒し、そして犯した。

その後私はどうしたのか、何をしていたのかよく覚えていない。彼女の所から飛び出し、次々と少女を襲っていたような気がする。巢立ちしたばかりのような少女の上で、私はさっき聞いた宣告が、やっと思覚でさるようになった。いや自覚したかどうかもわからなかった。ただに半分気が狂っていたからである。

そしていつのまにか、私は日没の海岸にいた。

「ピー・ピー・ピー」

あと2時間以内に事務所迄いっしょって下さい。いっしょじゃない場合は契約によりあなたを爆破致します。私は魂のぬけがらのような自分の体をむきずつて、ルナのいる所を目指した。とにかくもう一度会いたかった。会ってから考えたかった。それまでは、何も考えられなかった。

「おいちゃん。」

ルナはいつもの所において、変わらぬ声で迎えこんだ。私は言った。

「僕は戻ってくる。帰るが、きつと戻ってくる。10年……いや5年、5年待ってくれ、きつとルナの所へ戻ってくるから……」

ルナは目に涙をいっぱい浮かべて、軽くうなずいた。

「きつとよ……」

「ああ、きつとだよ……」

私は救助信号を出し、研究所の人に迎えに来てもらった。時間もなかったし、歩く気が起きなかったのである。

「よく帰る気になられましたね。」

私の後頭部に取り付けられた悪魔の装置を、取りはずす手術にかかっていた。あの人のいいドクターが、うつぶせになっていいる無力感のかたまりに声をかけてくれた。

「もう一度会いたくて…」

私はポツリと答えた。

「戻って来られる方皆さんそうおっしゃっておりますよ。」

私は念のため、聞いてみた。

「早い人で二、三年で来ますが、金持ちの常連客でね、一種のドラッグなんでしょうな。あなたのように普通の方ですと、金がそう簡単に集まるもんじゃないし、私がここに勤めて、5年ですからね、一人いたかどうかとところじゃないですか。来た方を覚えているわけでもありませんから……。あ、早くしないと時間が……。」

「その人たちが会えたのだろうか……。」

私が一人言のようにつぶやくと、

「えっ？ああ、あなたといっしょにいたルナという子にですか？まあ……難しいですね。十五才を過ぎた者、男に完全になついた者、重い病気になった者、なんかは原則として処分されるみたいですからね。あなたがたとえ5年未満に戻って来られても、ルナがあの状態だと……。」

「……」

私は手術台から、機械を首の後ろにつけたまま、飛び出した。ドアを出た所で警備員をなぐり、事務所の敷地から出ようとした。

その時、ルナの死体を後のクリスタルボックスに入れた、研究所のホバーバイクが、目の前を通りすぎた。

ルナ



私は半狂乱になつて、その後を追った。使わな
きの警備員たちが、追っかけて来ようとしたその時、
クターが飛び出してきて、
「もう時間だ、追うんじゃない。巻きごえを……。」
「君、もう機械はひっぱればとれるはずだ。とりたまえ、
ありがたい御言葉ではあったが、私の耳には届かなか
た。」

「おじちゃん。」

あのかわいらしい声が聞こえたような気がした時、私は
閃光の中心にいた。

(THE END)



進ちゃん体験記

米塚進也

私の友人に米塚進君という小学生がいる。名前を見てもらえばわかるように、彼こそ私のペンネームの由来である。彼は小学生ながら、立派なロリコン？で、私は彼よりずっと年上であるが、彼を親友だと思っている。

彼は、小学生という立場を利用して、実践的なロリコン活動をしており、私のような二次元ロリコンにとって、実にうらやましいほど立派な体験をしている。

今回は、彼から聞いたロリコン体験の一つ、少しばかり脚色して、下手ながら文章にしてみた。是非、嫌がらずに最後まで読んで欲しい。

進は小学生六年生で、身長百六十センチ、細身の美少年である。本編にはあまり関係ないが、成績は中の上である。

六月某日、進の両親は友人の結婚式に呼ばれて、家には進一人であった。進はかねてからの計画を実行すべく、その日学校で、新しいガールフレンドの青木美佐子家を遊びにくるよう誘った。

「ミサちゃん、今日さ、ボクの家に来ないか。」

「うん。お兄ちゃんち行く。」

美佐子は、すぐに答えた。

美佐子は三年生で、黒々とした髪を腰までたらし、大きな目をした奥にかわいい女の子である。美佐子が進の家遊びに行くのは、今日が始めてではなかった。だが今日はいつもとは違う。進の家では、進が一人、美佐子を、充分に綱を張りめぐらせて待ちかまえているのだ。

美佐子は、そんなことを知っているはずもなく、放課後、進の家へ遊びに行った。

「こんにちば。」

美佐子が言い終わらないうちに、ドアはすぐ開いた。

「いらっしやい。意外と早く来れたね。」

進はニタニタしながら美佐子を招き入れた。

「ボクの部屋へ行つて。」

美佐子にそう言つて、進は台所に向つた。台所に入ると、進はテーブルの上のガムテープとジュースの乗ったお盆を持ち、台所を出た。

「フッフ……やつとチャンスがめぐつて来た。」

進は、自分の部屋の前で立ち止まり、もう一度これらの計画を思つてほくそ笑んだ。

「ミサちゃん。」

美佐子は待つていたようにドアを開け、進を部屋に入れた。

「何笑つてたの？」

「い、いや別に……ジュース飲むだろ。」

進は、美佐子に微笑みかけた。

「今日はおばさまいないの？」

「うん、今日は二人でおでかけしてるんだ。」

こういう時には正直に話した方が、下手に警戒されないことを進はよく知っていた。

「そう。じゃあ二人だけね。」

美佐子が、微笑みながら言った。そんな美佐子を見て、進は胸が痛かった。

「あっそうだ。トランプをやるうよ。」

進はあわてて立ち上がると、机の引き出しを開けた。引き出しの中には、いつものトランプがあったが、進はそのとなりのハサミをじっと見つめた。

進は迷っていた。計画では、スキを見てガムテープで口をふさぎ、声をあげられなくなったところを、ベッドの上の布ひもで手足を縛り、このハサミで下着を切り、想いをとげるつもりだった。

「お兄ちゃん、トランプ見つかんないの？」

美佐子の声に、ハッと正気にかえった進は、振り返って美佐子を見つめた。美佐子はいかっていた。進は美佐子の黄色いワンピースを、奥によく以合うと思った。

「ミサちゃん、そのワンピースよく以合ってるよ。」

美佐子はずかしそうに下を向いた。進はその仕草を見て、考えを決めた。机の引き出しを閉めると、お盆の上のガムテープをごみ箱に捨てた。

「あ、お兄ちゃん、なんで捨てちゃうの。使うから持って来たんでしょ。」



美佐子は、ガムテープを捨てる進を不思議そうに見つめた。進が美佐子の口をふさぐ以外の何かに使用するため、下から持って来たと思っていたのだ。

「いいんだ、もういなくなっただよ。」

美佐子を見つめ、進は言った。

「お兄ちゃん、トランプは？」

美佐子の頭からガムテープの事はもう消えていた。「やっぱりやめよう。」

進は美佐子の前に座り直すと、ジュースを取り、一口飲んだ。

「ミサちゃん、お兄ちゃんのこと好き？」

「うん。」

美佐子は迷わず答えた。

「ミサちゃん、お兄ちゃんのことを愛してる？」

「うん。」

同じ答えが返って来た。

「ミサちゃん、好きということと、愛してるということとは違うんだよ。」

「どう違うの。」

「そ、それは……」

美佐子は進をじっと見つめて言った。

「ミサコ知ってるもん。一番好きな人のこと、愛してるって言うんだよ。」

「そ、そうだよ。」

進はホッとしたように言った。

「ミサコお兄ちゃんのことを愛してる。」

進はうれしかった。進はジュースを置くと、美佐子となりに行き、そっとささやいた。

「お兄ちゃんもミサちゃんのことを愛してるよ。」

進は美佐子に口づけした。美佐子は抵抗せず、じっとしていた。

「ミサちゃんはお兄ちゃんの恋人だよ。」

「……」

美佐子は黙っていたが、手に持っていたジュースをお盆に戻すと、進にもたれかかった。進は美佐子の手を取

ると、ベッドの上へつれて行き、横にした。美佐子は進の成すがままだった。

「ミサちゃん、お兄ちゃんと婚約してくれるね。大きくなったらお嫁さんになってくれるね。」

進の言葉に美佐子は小さくうなづいただけであつたが、進にはそれだけで充分であつた。手が美佐子の背中につき、ワンピースのチャックを下ろし始めた。美佐子はビクッと体を震わせたが、抵抗はしなかつた。進はゆくりと服を脱がせていった。

「ミサちゃん、愛してるよ。」

進はさっきから、その言葉を呪文のようにくりかえしていた。もう美佐子は、ミンキーモモのキャラクターパティとクツ下しか着けてなかつた。進は口づけをして立ち上がると、自分の服を脱ぎ始めた。

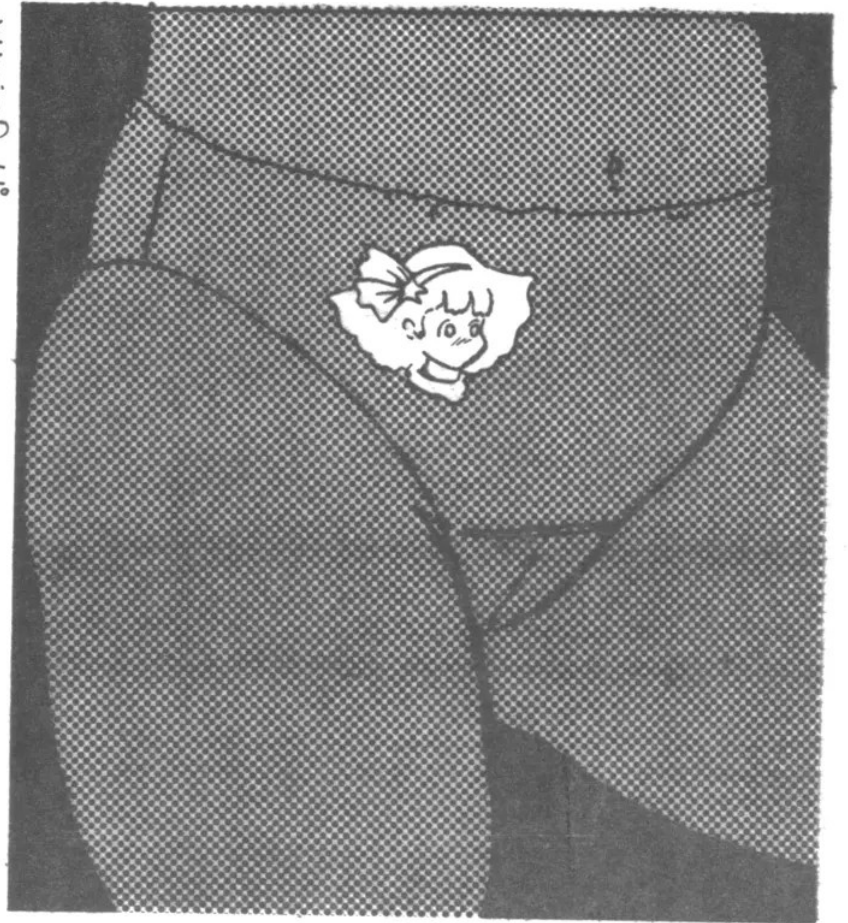
美佐子は目を閉じたまま、動こうとはしなかつた。進は、ザブングルのキャラクターパンツも脱ぎ、一糸まとわぬ姿になり、再びベッドに戻ると、美佐子の上にのり、首筋に舌をはわせた。

「あ……」

美佐子が小さな声を上げたが、進はそれにかまわず、首すじから小さな胸へと舌をはわせ、右の乳首まで行くと、サクランボのようなそれを口にふくんだ。

「お兄ちゃん……」

進の左手は残った左胸をやさしくさわり、右手は自然とパティの中へめぐりこみ、まだ硬さのとれぬおしり



をさぐった。

「ああ、お兄ちゃん。」

進の口からは、「愛してるよ。」の言葉は消えていた。

そのかわり、美佐子の口から聞こえるようになっていた。

「お兄ちゃん、愛してる。」

美佐子は、何度も同じ言葉をくりかえした。

進の両手は、いつの間にかパンティにかかり、舌はハソのあたりまで下りてきていた。

「ああ……うう……愛してる。」

進はパンティをヒザまで下げると、舌を美佐子の性器

にはわせた。

「ああ。」

美佐子は、シートをつかみのけぞった。進の舌は執拗だった。花弁の間をはい回り、豆つぶのようなそれを見つけると、口で強くすいこんだ。

「いや、お兄ちゃん、いや……。」

美佐子は大きく息を吸いこむと体をふるわせ、再び動かなくなった。

「ミサちゃん！」

進は体を起こし美佐子を見た。美佐子は、夢でも見ているようにボンヤリと、進を見かえした。進はそんな美佐子を見ながら、体をずらし、さっさからずっとボッキしている自身の性器を美佐子のそれにあてがい、一気に侵入しようとした。

「いたい！」

美佐子は、正気に戻り始めて、進に対して、抵抗らしき行動をとったが、その時はもう、二人は一つになっていた。

進と美佐子ちゃんは、その後、うまくいっているようだ。この間も二人で、私の家へ遊びに来てくれた。だが、進はその時、私に「かわいい一年生見つけたよ。」と、美佐子ちゃんに知られないように耳うちしていたから、彼の愛とやらも、意外と数多くあるようである。

(了)



結婚づーっ(一) 変態医大生A

カッ♡しゅう・あいはう

俺の名は吉岡保。現在二十七歳の医師である。幼くして両親をなくした俺は、脳外科の権威として世界的にも有名な祖父吉岡善蔵に育てられた。祖父の教育は、唯一の孫である俺を自分の後継者とするためか、徹底したものだった。実際友人と歓談したり、遊ぶ時間など全くないほどなく、それ故か、祖父を最近まで憎む心を持っていた。だが、そのおかげか、全国的にも有名な丁大医学部を首席で卒業することができ、祖父の研究を手伝うことになった。俺が二十四の時である。わずか二年後、皮肉にも脳外科医の祖父は、研究中の深層心理暗示装置を残したまま、脳腫瘍でこの世を去った。七十三歳であった。祖父の葬儀はたいそう盛大なものであった。政、財界の要人から、若き研究者まで多くの人々が集ってくれたが、ほんの二週間ほどで研究室に来る人もなくなった。死ねばそれまで、ということなのであろうか。だが、俺はやっぱりこのことで祖父からも、そしてまわりの人々の目からも逃げることででき、内心ほっとしていた。とにかく、研究中だった装置だけは完成せねば、そう思った俺は、研究所を閉鎖し、身のまわりの物だけ持って母方の郷里である塩谷に小さな医院、吉岡診療所、で医

療のかたわら研究を進めることにした。祖父は、装置をほとんど完成していたようで、俺のなすべきことは大してなかった。動物実験にも成功した。だが完全なる完成のためにはいわゆる人体実験が必要である。俺は、精神科をやっている友人たちに、なんとか配慮してくれるように頼んでおいた。ミテストでは平常人よりも精神に異常をもっている人間の方が効果が顕著なのである。……また、その実験のために地下に部屋をつくった。四畳半程度のの中に、何も無い部屋だが、悲鳴がきこえないように完全防音、しかも閉所恐怖症、暗闇恐怖症、などと精神の関係を調べるため、部屋は、わずかな量程度にまで機械的に狭くでき、光を一筋も通さないつくりになった。……た。へもちろん、光が必要な時の為に裸電球を内部から自殺しようともできないように、高さ2mの所に厚さ30cmの透明プラスチックを介しておいてあった。こうして、準備を整え、実験材料を待つ、というのまにか6ヵ月たった。

診療所の方も結構うまくいっていた。脳外科専門の俺にとって、内科や外科などをこなすのはおもしろかったし、何よりもまして、ここ戸島の田舎塩谷では、自然がまだ残っていた。やや不便ではあったが、魚釣りなどに余暇をすごしていた。こうしたある日、友人の富岡から連絡があった。

「お前が欲しいが、てた研究材料が手に入ったぞ。」
俺はこれを聞くと、ただちに、彼が住む戸県へと向った。

た。

富岡はK県で精神科をやっている。俺と奴は大学時代の親友である。祖父への反発もあったのだろうが、妙に気のあう二人は、よく一緒に、丁大学の近くの公園で覗きや下着泥棒もやった。別におもしろいからではなく、ただに何となくなののである。俺も富岡も成人女性には、ほとんど興味をなくしていた。大学に入りたてのころ、二人でトルコに行き、別のトルコ嬢から同じ言葉をなげかけられた。すなわち「短小」である。それ以来女が恐くなってしまった。

ところが、ひょんな事から再び女に興味をもちはじめた。小児科の外来実習の時である。5歳の少女が、風邪をこじらせてきていた。診察のため、下着一枚でベッドに横たわる少女をみていると、胸が何故かあつくなってきた。少女はふくらみも何もない女性。俺は少女の中に女を意識したのである。富岡も同じで、俺達二人はそれからというものの暇があれば少女の集まりのような所や、小学校、幼稚園付近をうろついた。変質者にまちがわれそうになったこともあったが、なんとかやりすごした。

だが、卒業と同時に、この楽しみも研究のために、つぶれてしまった。富岡は結婚し、郷里で嫁方の病院を手伝い、俺は俺で祖父の手伝いをしていた。その彼から突然研究材料の話がきたのである。

K県の県庁所在地し市の市街地に彼の病院はある。駅につくと、約束通り彼が待っていた。学生時代とはうっ

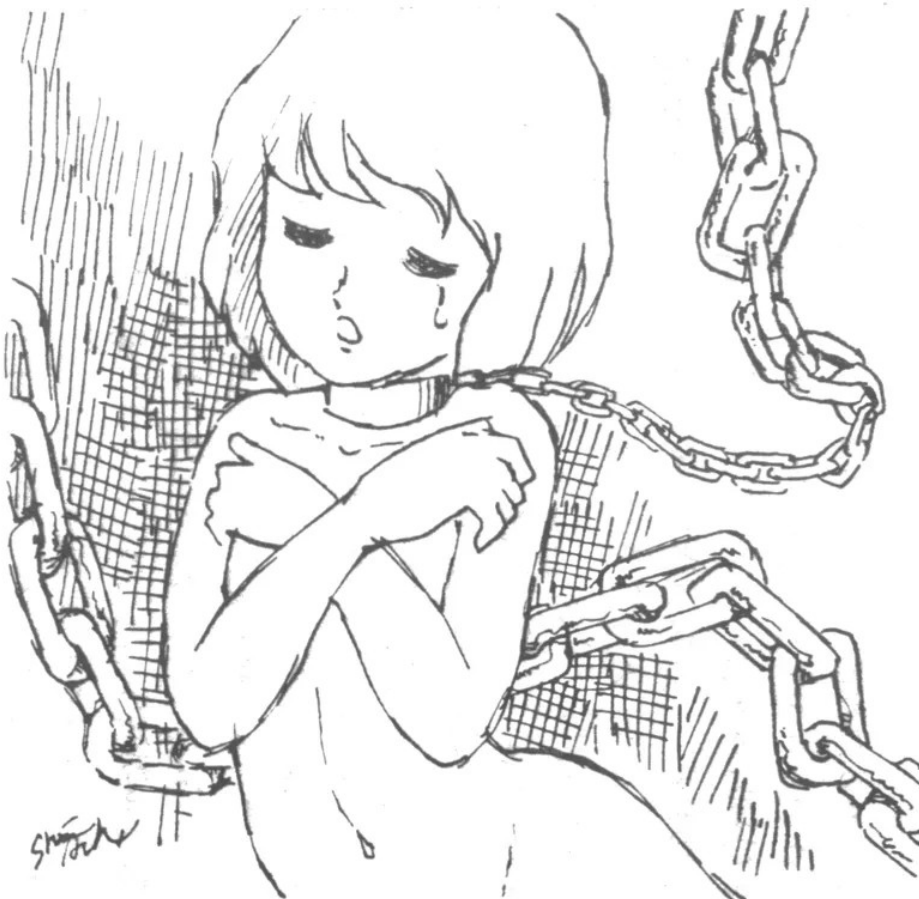
てかわって、健康そうな浅黒い皮膚をした彼は、きちんとスーツを着こなしていた。

「さっそくだがな、研究材料」このはの娘だ。」

病院に着き、俺を重症患者の机を入れる特別房の一室に連れていくと彼は言った。

「この娘はどこも悪くない。お前のためにと、ておいたのさ。」

彼の話はそれから続いたが、ここで簡単に書いておく



と、先日家族三人が乗った乗用車が海に転落した。偶然近くを通った彼が助けに飛びこむと、少女だけが何とかはい出してきたので助けられた。助けあげてみるとまだ回りに人はいない。そこで俺の少女趣味と研究材料を欲していたことからここに閉じこめて連絡したとのことだった。少女は、5歳で名前を穂積真里といった。両親を一度に亡くしたショックでボケッとしたまま患者用の灰色の服を着て、ベッドの上に座りこんでいた。

「どうだ。この娘は。ちょっとどうまい具合に、既に死亡として扱われている。警察も今日捜査を行方不明のまま打ちきったということだからな。」

俺が何も言えないで少女をみつめていると、彼は続けざまに言った。

「もしこの娘が気に入ったら早く連れて出てくれ。お前のためにここまで手配したんだからな。事務をやっている家内にみつかるはずない。」

俺がその声で正気に戻ると、彼は真里を連れ出し、俺と真里を車におし入れた。

「この車は、どうせもうすぐ車検切れだし、お前にやる。早く行け。」

彼はそう言っ、て俺を送り出してくれた。だが、その時の彼の目が希望の色を出していたことを俺は決して忘れない。彼の目は、家の事情でやむおえず興味もない結婚をしてしまった無念さをあらわしていたのだ。

来る時は特急で三時間程度だったが帰りは車だった

ため比較的早かったが、運転に夢中で、後部座席にいる真里をじっくり見ることは、ほとんどなかった。やがて俺の診療所につき、真里をじかにみると、ちょっと妖精のようにかわいらしいことがわかった。ただ灰色の服のため、全く地味に升えてしまっているのだが。そして、この時である。俺の頭に恐ろしい考えが浮かんだのは。少女を診療所に入れると、さっそうと例の装置をひっぱり出して、少女の父母の死の意識をいとり、俺が少女の叔父だという意識を与えた。……この程度ならいくら試験中とはいえずうまくいくことはわがっていた。そして少女は俺の姐になった。このときはじめて少女は口をひらいた。

「叔父さん。パパやママは。」

俺はさそうように言った。

「パパやママはね外国へお仕事に行っただよ。二年間。その間、真里ちゃんも叔父さんちにいるんだ。いい娘にしないよ。パパもママも帰ってこないよ。」

「あがったよ。真里いい娘にする。」

彼女は快活に答えた。

「それにはね。家のしきたりに慣れなくちゃね。この家では女の子はいつも裸でいて、四つんばいで歩くんだよ。それに首輪もしてね。」

この言葉をきくと、さすがに真里の顔は曇った。

「嘘でしょ。」

「いいや。」

俺はそう言つて、少女の首に首輪を有無を言わせずはめ、彼女を裸にした。

「四つんばいで歩きなさい。」

「イヤ。」

そう叫ぶ真里に頭にきた俺は、例の実験用の部屋に、泣きわめくのを無視して連れて行くと、やっとな横になれるほどの広さに調設して、少女を投げ入れた。そしてそのまま二日間、水も食物も与えないまま閉じこめた。

二日後、例の部屋の戸を開けると、相当泣きはらしたらしく目をまっかにして、排泄物の汚れを体中につけてぐったりした真里が横たわっていた。俺も医者だ。死ぬ心配は絶対にならないように扱っているのだ。思った通り言葉は話せた。

「真里ちゃん。叔父さんもこんなことしたくないんだよ。でもね、叔父さんと住む以上叔父さんの言うこと聞かなきゃね。わかったかい。これから絶対に四つんばいで歩くんだよ。」

俺ができるだけやさしく言つと、真里はうなずき、

「うん。」

と、消え入りそうな声で言つた。

「さてと、お腹すいたろう。ちよつと待つてこね。」

そう言い残すと俺はバケツ一杯の水と、大用の器に入れたスープを持ってきた。

「さあ、これをお飲み。でもね、ゆっくりとだよ。今日はおかわないけど、明日からは、手は使っちゃダメだ。」

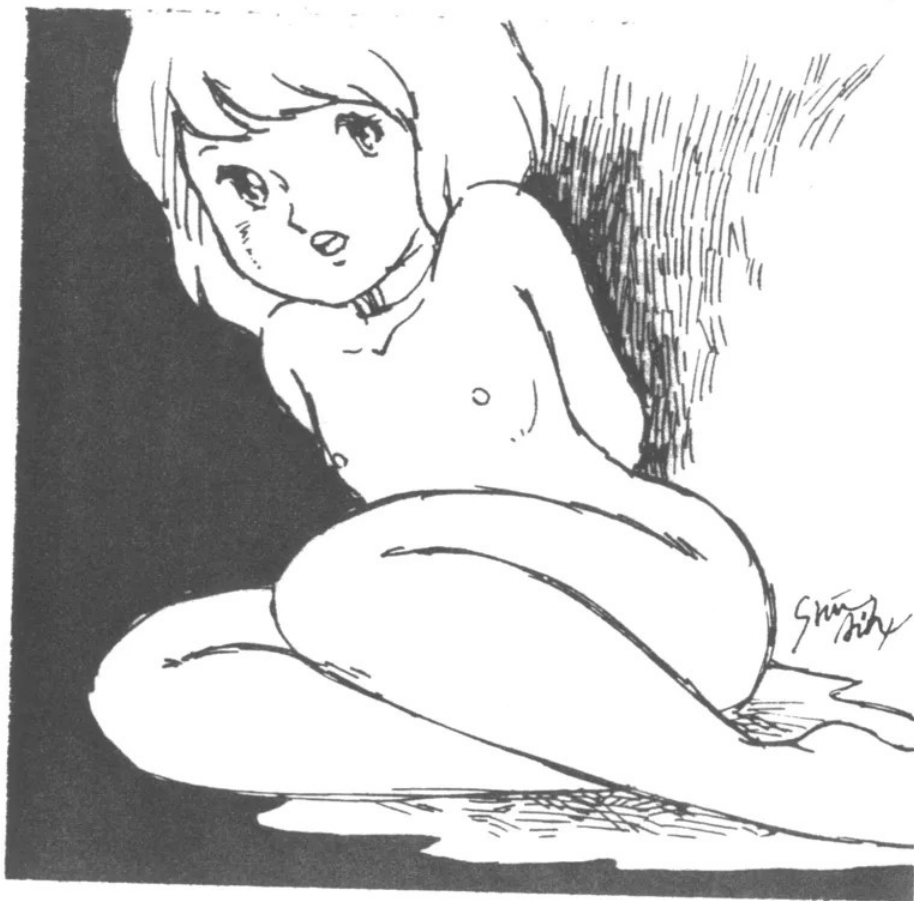
犬と同じように食べるんだ。じやないと、食べさせてあげないからね。」

真里がゆっくりとスープを飲みほすのをみながら俺はこうつけ加えた。真里が飲みほした後、俺は彼女に、バケツの水をかぶせた。幸い晩秋で外は寒い、ここは地下のため、十五度近くある。だが、さすがに冷たいのか、それとも体力がおちてるせい、真里は寒そうだった。常人ならいくらなんでも、ここで可哀そうに思ひ毛布の一枚をかぶせてやるかもしれない。ところが、その時の俺に人間性と呼べるものは残っていなかったらしい。部屋の外に備えつけてあるちりとりを持つてきて、この二日間彼女が出した排泄物を口でくわえてその中に入れさせた。彼女は極度に俺を恐れていた。泣きはしたが以前のようには逆らひもせず、言われた通りに自分の出したものを口で集めた。そして、それを見ながら俺は満足だった。

翌日から一週間、俺は私用を称して、出掛けるふりをして診療所を休んだ。実際はふりだけで、すぐに戻ってきていたのだが、地下室での一週間は少々悲惨なものだった。彼女を犬として扱い、連日連夜SMを行つたのである。もちろん治療してやるから生きているのだが。二日間でつくり出した、木馬などを例の部屋につめこみ、そこで寝起きを共にしたのである。8時頃に起床。それからすぐに彼女をさがさづりにしたまま朝のムクうち100回、食事といつても彼女が食べるのはドッグフードだけ、それに続いて木馬遊びなどと延々10時間以上続けた。

三日目位になると、泣く気力もなくなっていたが、俺はがまわらず続けた。内でも楽しかったのは、木馬遊び+火責めである。彼女にストッキングをはかせ三角木馬にのせる。ふつうおもしろいには、彼女の体重の3/4程度のものを着ているが、火責めを加える時には彼女の体重に等しい位のものがよい。足の固定に必要なのだ。その状態で、ライターに火をつけ、彼女のストッキングを焼いていく。こげくさいにおいとあいあま、て彼女の亀裂からしたたる血のにおいは、一層俺をふるいたたせるものであった。電気責めもよいが、あれは悲鳴だけでおもしろくない。少々スカトロの気もある俺には、逆さずりにして彼女に浣腸し、排泄物を管で導いて、彼女の顔に全てかけてやる。というのもおもしろかった。だが、つこご一言いっときたいが、俺は彼女を抱きはしなかった。俺はまだ、彼女を女としてはなく動物としてしかみていなかったのだ。

考えてみれば、俺が狂いはじめていたのは、この時からかもしれない。研究も診療もそ、ちのけで俺は彼女をいじめぬくことに熱中していたのである。一週間後、予定どおり俺は遊びを中断して、診療所に帰ってきたふりをした。診療所がある塩谷は小さな街だが、比較的病院も多いので、人々は別に困った様子でもなかった。俺は、真里の手当てをしてやったが、彼女の体はムチによる傷と、タバコをおしつけられたヤケドがかなりあり、股間はまっかに充血していた。



「当分はムリか。」
そう思うと興味も失せ、十日程度の食事と水をそばにおいて、俺は全く気にもかけずにいた。
たしか、それから九日ほど後だったと思う。再び装置にかかっていた俺は電源のバッテリーをとり地下の方へ行ったが例の部屋のことか気にかかり戸をあけてみた。俺が部屋に入った途端であった。真里が俺の方へ泣きながらとびこんできた。

「叔父さん。恐かったよう。一人にしないでよう。」

泣きながらこうきっていたようだ。彼女はその時、立ち上っていたが、今回は見のがしてやった。彼女の傷はだいぶよくなっていた。赤くふくれあがっていた股間も、かなりもとに戻っていた。食事をみると、ほとんど食べていないようだった。俺にもたれかかって泣いていた彼女を放り出すと、何も言わずに部屋を出て再び、研究に戻った。だがその日の仕事が終わりに、自分の部屋でくつろいでいた時である。何故か、彼女の「一人にしないでよう。」という言葉が頭の片すみに大きな波紋を投げかけはじめ、どうしてもいられなくなってしまう。俺は例の部屋へ行って見た。彼女は眠っていた。胎児のように、膝をかかえるようにして寝ていたのだ。俺がやり動かすと、すぐ目がさめた。

「昼間どうして何も言わなかったかわかるかい。」

俺はきつい目をして言った。

「真里が悪いことしたから。」

彼女はつぶやくように言った。

「もうしない。いい娘にするから放つとかないでよう。」

「真里ちゃんには叔父さんのこと好き。」

俺は尋ねた。

「うん。」

「痛くてもいいのかい。」

「うん。」

彼女はこの時になつてやつと笑ったようだった。「痛く

つても」の言葉の、「毎日来てくれる。」の意を感じとったのだろう。俺はたしかに残酷な人間だが、この時ばかりはいじらしく思えた。

「真里ちゃん、誕生日はいつ。」

「十二月二十四日、クリスマスの日。」

「クリスマスか、あと二十日ちよつとだな。」

そう考え。

「真里ちゃんクリスマスには、どこか遊園地でもつれていったげようか。」

と尋ねた。

「ホント。」

「ああ。でもね、もう一度言うけど、この家じゃ真里ちゃんは大と同じなんだよ。それから食事も毎日食べるんだ。いいね。毎日ここには二時間ずつ来るけど、これからはね。首輪の他にもこれもつけるよ。」

そう言つて俺は手の指が全く使えないよう。握りこぶしのままで手を固定する特殊な手袋を彼女にはめた。

「この部屋は臭いなあ。」

今さら想いだしたように言う。臭いのも当然、トイレがないから排泄物はまきちしたままである。

「ちよつとどきなさい。」

俺は、彼女をどかせて、排泄物を洗い流した。ついでに、血のこびりついた着め具も洗つておいた。彼女は、いつもなら口でやらされているのに、俺がやつてやったことを不思議に思っているようだった。

「明日また来る。ちゃんと食べとけよ。」

そう言っ、さすがに寒そうだったのて体をふいてや
てから、毛布を一枚かけてやっ、てから部屋を後にした。
何故俺が彼女にクリスマススの話をしたり、毛布をかけ
てやったりしたのだろう。自室でベッドに横になりとり
とめもなく考えた。もはや彼女は犬と同じ研究材料でも
ない。研究材料には別の精神病患者が家族の申し出もあ
り三日後にあてられることになっている。俺が彼女を愛



した。まさか、相手は真まみれの犬同然の少女だ。
次の日からきつかり二時間ずつ、彼女をSMで責めた
てた。だが、最後に縄をほどいてやるうちに決って彼女
尋ねる。

「クリスマスまであと何日。」

の言葉を聞くと妙にいとおしく思え、彼女の体を毛布
の上から抱いたまま寝たことも何度かあった。そしてワ
リスマスの前日、俺は真里のために、洋服、コート、く
つを買った。その日は彼女を縛ったりもせず、俺が
ら逃げようなどと考えていないかを調べるため、深層心
理を調べたが、俺は愕然としてしまった。真里は俺を憎
み切っていると思っていたのに、恐れてはいるが心から好
きである。という結果が出たのだ。

クリスマス当日。俺は、温水で、（今まで彼女を洗う
のは冷水だった）体を洗ってやり、今日だけは目玉にみ
るといって彼女を立たせ、服を着せてやった。手のいま
しめ、首輪も。だが、驚いた。彼女はほんとうにかわ
いいのだ。彼女を部屋から出してやった。俺の手にすが
るようにしがみついている。ここ数ヶ月この部屋に閉じ
こめられていたので、ややふらついているのだ。

「電車に乗りたい。」

と彼女が言うので、電車で遊園地に連れて行っていっ
た。こういう所ははじめてだったのがもしれない。はし
やぎまわり、俺を困らせた。昨日まで汚れた部屋で責め
まくられていた彼女と同一人物とは少し考えられないく



らいだった。食事をさせ、スプーンなど長い間使わせていながったため、じかに口で食べようとして俺を困らせた。彼女がねだった人形を買ってやって帰したが、その頃にはもう暗くなっていた。

家へ着く頃になると、今日はしゃぎすぎたのがわかり、叱られると思うたのだろう。しゅんとしてしまった。帰るのを嫌がっているようなので、

「誕生日おめでとう。家へ帰ったらパーティーをやるわ。」

と言った。何故こんな言葉が口をついて出るのか、

俺にはわからない。自分で自分がわからなかった。家へ着くと服を脱ごうとする彼女を押しとどめ、俺の部屋へ連れて行った。あらかじめ飾りつけておいた部屋とケーキをみて、真里はびっくりしたようだった。

「誕生日、おめでとう。遊園地はクリスマスプレゼントそして、このケーキが誕生日のプレゼント。」

そう言うと、真里はほんとうに、しそうなしぐさで答えた。ろうそくに火をつけ、それをふき消し、で続けた二人の誕生パーティーは続いた。

「真里ちゃん。もうあの部屋に戻る時間だね。今日は特別だからここで寝ていいよ。そのかわりね。叔父さんとお遊びしよう。」

「何して。」

「結婚ごっこだよ。」

「結婚ごっこ。じゃあ真里、叔父さんのお嫁さんになれるの。」

「ああ、でもね、儀式があるんだ。とても痛いよ。」

俺がそう付け加えると、

「いい、真里痛いの平気だもん。」

そう答えた。俺は真里に軽く口づけると、ベッドの上に横にならせた。

「いいかい。絶対に声を出しちゃダメだよ。声を出したら、気絶したりしたらそれで終わりだからね。」

そう言い、すばやく自分の服を脱ぐと、彼女の服もは

ギョッていった。彼女に俺のペニスをほおばらせる。何
度もしゃくり上げ、先がのどに当たる度に、涙を流すが
言われた通りに声は上げない。一生懸命に舌を使って約
10分程度かかっ、て俺の第一の爆発をささった。もちろん
彼女はそれを全て飲み下した。だがその程度では俺は止
まらなかった。大人の女では短小でも少女にとっ、ては臣
物である。正常位の形で再び彼女にいんどんだがなかなか
結合できない。彼女も痛みをこらえて腔を一生懸命収縮
させやっ、とのことを入った。だがこれで終りではない。
穴はもう一つあるのである。肛門にいんどんだ時は、さす
がに彼女も痛みのせいでかかが入らない。だが途中にす
るのが、俺は薬で肛門括約筋をゆるめて侵入してやっ、
た。白いシャツが血で赤く染まり、今日の彼女の魅力を
たたえているようだった。彼女も今日で6歳。小学校入
学の年である。

「ずっ、という娘でいたら小学校にも行かせてあげるよ。」
彼女の意識がは、きりしてからきった。

あれから二ヶ月。もう二月である。真里は正式に俺の
養女とな、たが、特別な日を除いて、毎日SMを繰り返
し、例の部屋で首輪フきの生活を送らせている。最近
は何か彼女の方から責めを望んでいるようである。時
々、散歩に家を出させてやるが、毎度のことながら四つ
んばい、便はたれながしで、俺が来る度に、口で捨
わせている。小学校上げると言い、手続もとった以上不安で
ある。まあ最終的には、ほぼ完成した例の装置でマナー

覚えさせなくてはと思っ、ているが。ともかく、俺は彼女
とのSMプレーをやめるつもりはない。彼女もそれを望
んでいるし、これも彼女に対する一種の愛情だと思っ、近
頃である。

第一部 完



雪絵あるいは恋人

聖羅 伶

彼女の名前は矢野雪絵。

今年で8才になる近所の子だ。

長く真っ直ぐな黒髪といい、スラリと伸びた可愛い足といい、なんとも言えない美少女で、親が共働きのせい、少々気の強い性格だが、それが容姿の美しさと相まって、雪絵を一層魅力的にしている。

雪絵はオレには心を許しているのか、オレの部屋に良く遊びに来た。

その日は夏休みだったとはいえ、雪絵の両親は例によって仕事で、雪絵もまた友達との約束も無いとかで、オレの所に遊びに来ていた。どこかへ行こうかとも思ったが、外は暑いし、それに比べてオレの所にはクーラーなんぞもあったので、結局家で何とはなしに過ごす事にした。

「お兄ちゃん。」

テレビでは面白い番組もなく、かといっておもちゃにも飽きてしまったのか、雪絵は机に向かっていている（もちろん机にただ向っていただけなのだが）オレに飛びついて来た。

「つまらないから、一緒に遊んで。」

「でもお兄ちゃん、お仕事があるんだよ。」

「雪絵一人じゃつまらないの。」

しなやかな両腕をオレの首にからませ、顔を、今にも口づけしそうな程近づけて来た。

「おにいちゃん。」

可愛らしいくちびるがにつこりと微笑みかける。オレの抵抗もついでだ。

「よし、遊びうか。」

雪絵の笑みが顔いっぱいに広がった。

「さあ、何して遊ぶ。」

「うーんと、えーと……」

「プロレスは？」

下心みえみえではあるが、雪絵にはそんな事がわかるわけもなく、喜んで承諾した。

何故相撲ではなくてプロレスなのか、と言えば、相撲は倒してしまえばそれまでだが、プロレスは相手を押さえ込まねばならない。ジタバタする雪絵を（胸や太股に軽く触れながら）押さえ込むのも楽しいし、雪絵が、その小さな手足で、オレを一生懸命押さえようとする様子を見るのも、また楽しいものだ。

「よし、来い。」

「えいっ、えいっ。」

雪絵はオレの体に抱きつき、可愛い手で押し倒そうと頑張った。が、それよりオレの雪絵の上にのしかかりたい欲望の方が強かった。

彼女ごと倒れこみ、その拍子に胸に片手を入れた。しとやかな肌をすべり、小さな突起を軽く撫でてみる。そして一方の手で、汗をかいた太股をそうと撫で上げる。雪絵は息をハアハアはずませながら、笑いこぼる。

「きやはは……やだめ、えっち」

「え、あ、ごめんね」

我ながら白々しいとは思ったが、それでも一応は謝っておく。

そんな事を繰り返しているうちに、いつの間にか雪絵は寝入ってしまった。

安心してきっているのか、何の警戒心も無きように、そして可愛く眠る雪絵。

次第にオレの中で、何かが頭をもたげてきた。

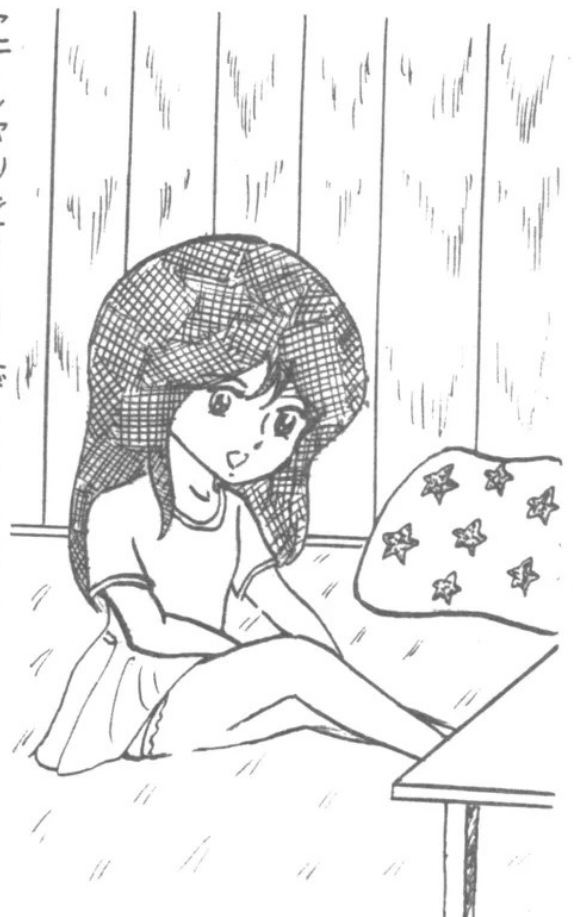
オレはそつと手を伸ばして、美しいしなやかな足に触れてみた。

足首からふくらはぎへ、ふくらはぎから膝小僧へ、そして太股……。スカートの中に手を入れ、ショーツの上から軽く触れると、浅いクレパスに沿って小指の爪を立てたままツーツと動かす。

「あ……あうん」

雪絵の身体がピクッと跳うち、寝返りをうつ。ここで止めておけば良かったのかもしれないが、この時の俺の頭の中には、もはや理性など見当たらなかった。

Ｔシャツをまくり上げ、なめらかな肌を露にし、ゆっくりと手の平を押しつけるようにして撫でまわす。さら



にＴシャツをまくり上げていくと、平たいが、しかしつややかな肌に小さな突起が姿を現わした。オレはたまらず二本の指で乳首をはさみこすり上げる。

乳首に口づけしようとしたその途端、

「う……うん……お兄……ちゃん？」

雪絵が目を覚ました。

最初は寝ぼけていたのか、訳がわからず呆然としていたが、一瞬の後には事態を理解したのだろう、素早く身を引いていた。

「やん！何!？」

「ゲームだよ」

言うなりオレは雪絵をつかまえようとする。だが雪絵は冗談や遊びではない事を悟り、スルリと身をかわすと、戸口へ向って一目散に逃げ出す。

「雪絵！」

「思いを遂げるのは今だ。」

内なる声にせかされるように、オレは猛然と雪絵に飛びかかった。

「きゃあー！」

小学生が、まともに大人にタックルされたのだから、たまらない。雪絵はふっとんで、壁に背中をしたたかうちつけた。それでもなんとか立ち上がろうとする雪絵を、後ろからかかえ込んで居間へ連れていく。

「いやあーっ、放して！パパア、ママア、助けてー！！」

泣き叫びながら、手足をバタバタさせもがき暴れる雪絵を、ソファアの上に放りだす。

「パパもママも来やしないさ。」

自分の声ではないようなかすれた声だった。

「おとなしくするんだ。」

語気強くそう言うと、オレは幕を取り出し、両手を後



手に縛り上げる。

「雪絵が可愛いからいけないんだ。」

月並みなセリフだが、しかしよく考えてみればとんでもない責任転嫁だ。

雪絵の両手を縛り上げたオレは、一休みしてから、ゆっくりと立ち上がった。小さな瞳を一杯に見開き、足をすくめて逃げようとする雪絵をつかまえて抱き寄せた。

「いやー、バカ！っ！！やめてーっ！！」

暴れる雪絵を押さえつけ、スカートを脱がせTシャツをたくし上げた。右手で首を押さえ、左手をショーツの中に差し込み、可愛い乳首に唇を寄せ、無器用に吸う。

「あ、あう……ぐっ、や、やめてえ、お願い、お兄ちゃん……ん。」

雪絵はオレの手から逃れようとして身をよじり、足をバタつかせた。が、首を強く押さえると、やがておとなしくなった。締め殺してはいけないと思い、両手を胸に回し、唇を首筋へと滑らせ、耳に口づけする。

「お願い……お願い、やめて、助けて……」

涙を浮かべて哀願する雪絵を抱き起こし、ショーツを引き下ろした。

INTER MISSION

ぐったりとなった雪絵を抱きかかえ、ベッドへ連れて

行き、うつぶせに寝かせた。そして、可愛い両手を縛っていた帯をほどき、Ｔシャツを脱がせた。

その途端、雪絵は素早く身を起こし、ベッドから飛び降りようとした。オレはとっさに雪絵のくるぶしを捕まえる。上半身をベッドから乗り出すような形で倒れ込んだ雪絵を引き戻し、仰向けにしてのしかかる。

「いやっ、いやあーっ」

なおも暴れる雪絵の頬に平手打ちをくらわせ、首をも締めつける。

「おとなしくするんだ！」

二度目のセリフだったが、効果は充分だった。オレは泣きじゃくる雪絵に口づけをし、身体を撫でまわす。乳首をつまみ、こすり上げ、それから腹、腰、そして太股から花弁へとまさぐっていった。雪絵はオレの下で、肩を震わせて、汗にまみれた身体をよじって、懸命にもがく。

「あうっ、や、やめて……」

オレは構わず右手を臀部の割れ目に差し込み、ゆっくりと動かす。その間上気してピンク色に染まった乳首から口を離すことなく、吸い、咬み、心ゆくまで舐め回す。

「きやう、あ、ああう……」

雪絵は身体をピクピクと引きつらせ、息を荒だたせ、声をあげる。オレは明らかに反応し始めた雪絵の体を柔しめつつ、胸から太股へと、そつと舌を這わせ、さらに太股をゆっくりと舐め回す。



「だっだめーっ、いやーっ！」

必死に抗い、汗に濡れた太股に満身の力をこめて、足を閉じようとする雪絵。

だがオレは両足をしっかりと押さえつけ、彼女の花弁に口をつけ、舌を差し入れる。つばみの中を、ゆっくりとまさぐり、小突起を探りあてると、舌で包みこむようにして舐める。

「ひっ、ひっ、あう。」

雪絵は、肌を汗で光らせながらしなやかな身体をのけぞらせ、手足を硬直させる。もはや抵抗する気力も失せ、甘美な蜜をあふれさせ、オレの舌の動きにあわせて身体を痙攣させ、息をハアハアはずませながら、喘ぎ、のたうつ。

「いい子だ。」

唇の端を引きつらせるように歪めると、オレはさら

に舌を差し込み愛撫する。そうしておいて、右手を再び後ろに回し、左手は腰を押さえる。前後から責められて、雪絵はますます息を荒くし、身体の動きを早め、首を左右に振って、甘い泣き声を上げ始めた。

「あ……あぁっ……うっ、くうっ」

ついに耐え切れなくなり、絶叫と共に身体を九十度よじらせ、雪絵は極みに達した。

「ひ、ひっ、あううっ」

オレは、今度こそ本当にぐったりとなった雪絵をうつ伏せにした。小指の爪を立て、そっと背中から臀部へと走らせる。

「ひいっ」

雪絵はその感触にビクツとして顔を上げ、呻くように泣き、哀願する。

「も、もういやぁ、許してえ……」

しかしオレは無言で雪絵の胸を押さえ込み固定する。

「な、なにをするの……雪絵、もういやよオ」

「もうすぐ終わるよ」

そう言うなり、オレは後ろから自身を挿入させた。

「きゃぁっ、あうっ、いっ痛いっ！やめて、やめてえっ!!」

雪絵は悲鳴を上げ、力を振り絞って身をもがき、苦痛から逃れようとした。が、汗に濡れた肌はお互いを離そうとはせず、もがけばもがくほど深く深く入っていく。

「だめえっ、いたっ、痛……」

雪絵は身体を強張らせた。しかし、オレがついに極部まで達すると、力なく身体を崩した。オレは雪絵の中で小刻みに運動する。

「うっうっ……くっ……あぁっ……」

ばっばかぁ、ばかぁ……お兄ちゃんなんが、大きらいよオ……」

雪絵は荒い息をしながら泣きじゃくり、しかしそれでもいつしかオレに身体をまかせていた。

「愛しているんだ……愛してるんだ雪絵、誰よりも好きなんだよ……」

雪絵の中で果てながら、オレはそう呟いていた……

雪絵は今日もオレの所へ遊びに来る。

(了)





夏への花

沈黙月

ある日、ふと気がつくときぼくは電車に乗っていた。夏につつまれた山の中をたった一面の電車が、一本の線路をのろのろとたどってゆくのだ。

一体、ここはどこなんだろう。窓の外は緑の木々と青空が果てしなく続いている。一体、電車はどこへ行くんだろう。乗客はぼくの他には誰もいないようだ。風は熱く、からんとした車内をひょうと駆け抜けてゆく。

いや、あれは……女の子。

ゆっくりと、こちらへ向って歩いてくる。年は10才くらいだろうか、白い半袖のワンピースを着ていて、その下からすらりとした足が見える。はだし。長い黒髪を風になびかせた美しい子だった。

女の子の瞳に光がきらめき星をつくる。だが、ぼくはあるものをひどく強く感じた。

さびしさ……だろうか。

悲しみ……だろうか。

女の子は、ぼくの前までくると小さなかわいらしい声で告げた。

「あ、あの だいてください。」

ぼくは手をさしのべると、女の子をだきあげた。軽い

なと思った。やわらかいと思った。なんだかわからないが、甘い香りがすると思った。だが、なぜなんだろう。女の子の体はまるで氷のようにつめたいのだ。

「わたし、さあいいんです。」

女の子はいった。

「あなたためて……ください。」

そして、美しく澄んだ瞳をゆっくりと閉じた。ぼくの左手は女の子の肩をはなれると、白いパンツにつつまれた小さなおしりにまわった。そして、上からすべりこませる。割れ目にそって指を進めてゆくと、やがて幼く固い花びらに触れる。女の子はゆくりと身をふるわせた。ぼくは、愛撫をはじめた。

「なぜ……。」

ぼくは尋ねる。

「君の体はこんなにつめたいんだ？」

女の子は、かわいらしく、息をはずませながら答える。

「わたしはとってもさびしいの。わたしはとってもさ

あいの。わたしをだいて、だきしめて……あ、あう……あ……。」

ぼくは女の子の体の重さが、ふっとなくなるのを感じた。そのまま音もなく、くだけ散り風の中に流れていてしまった。後には——ただ甘い沁りだけが残った。

ある日、ふと気がつくとき、ぼくは町の薄暗い路地裏に立っていた。ここは……。

電車はどこへいったのだ。
山はどこへいったのだ。
線路はどこへいったのだ。
空はどこへいったのだ。
風はどこへいったのだ。
あの子はどこへ……。



ぼくは足もとに小さな名もない白い花が咲いているの
を見つけた。こんなろくに光もささない場所に……。
しばらく見つめていたが、やがて手をさしのべる。
ぼくは——。

(おわり)

戯馬

庫裏嶋 静馬

ギバは大岩めがけて大きく跳躍した。

思いつ切り全身をはじかせるように飛ばして中空を移動する。長い黒髪が左右に大きくゆれる。

ギバは見事に大岩の頭の部分に着地した。里の人間が見たら仰天して腰を抜かしたことだろう。なにしろ言い伝えによれば、大岩はもともとある山寺に飼われていた山犬(狼)で、昔この山に巣くう妖怪と戦い、相打ちとなり石になったのだという。粗末にすると祟りがあるというのだ。

しかし、ギバは気にもしない。

「大岩は祟りなんかしない。」

そう里人の噂をきくぱりと否定したのだ。それを証明するかのうちに、ギバは祟られた様子もなく大岩の上に寝そべて冷たい感触を楽しんでいる。

もっとも、神性を帯びたものは不思議にギバとは相性が良いらしく、以前鎮守様の社に里の子数人と一緒に屋根に登って遊んだ時なども、熱をだして寝こまなかったのはギバだけだった。熱が下がらずに死んでしまった子供もいたのだが。

そんな事が度々起こると、里の親たちは自分の子供を

ギバと遊ばせないようにした。そのためギバは一人で山の中で遊ぶ事覚えた。

ギバは今年数え十二歳。自分の背丈ほどもある黒髪を動き易いように腰のところまで持ち上げている。顔は瓜栗型で切れ上がったマツ毛の長い目、つんと立った形の良い鼻、山の精気に彩られた桃色の唇が幼さの中に自然の造形の妙と言える顔を造り上げている。

彼女の行動は常に気まぐれで、無鉄砲で、それでいて慎重だった。その仕草はたおやかで、時に荒々しく、そして全ての場合愛うしかった。

山の中にいる時、ギバの美はその極だった。それは空石が光を浴びて輝くのと同じ事だろう。

ここ四、五日の間というものの、ギバは大岩の付近で時を過ごした。数日前に里の噂で、夜になると大岩が動き出して頂上までかけ登り、三度遠吠えしてまた元の場所に戻ってくるという話を聞き、大岩が動くところを是非見てみたいと思ったからだ。

しかし、大岩はさっぱりと動く気配を見せず、さすがにギバも飽きが来ていた。

「ねえ大岩、ちょっとだけでいいから動いてみて。」
ギバは大岩の肩の部分にもたれかかって甘えた声で言った。が、大岩は足の爪一つ動かす気配も見せず、怒ったギバは頬をふくらませてすねたようにぷいと立ち上がり、里の方へすたすたと歩いていってしまった。

しばらくして、そこを通った里人は、犬岩が疲れたように前足を倒して寝そべっているのを見て泡をくって里に帰り、そのままふとんをかぶって寝こんでしまった。

それから一月もたった頃、里に一人の得体の知れない男がやって来た。ある昼下がりにふらりと山の中に入ってそのまま下りて来なかったが、里の者で男の姿を見た者があり、その話によると、男はひどく痩せていて動作も危かしかったが、目だけは異常に輝いており、背中に笈のようなものをしょっていたという。

得体の知れない男は、しばらくの間里の噂の種となったが、誰にもその正体はわからなかった。

ギバは山奥の川の冷たい流れに足を浸しながら歩いてた。吹きだした汗がみるみるうちにひいていく。

今は夏の盛り。一年で最も暑い日々が続く季節。

突然、里の方はうだるように暑いだろうな、とギバは思う。人も家畜も道端の草も照りつける太陽にまいていいるだろう。もっとも、里の子供たちは川で水遊びしているだろうけど。

「この川は水遊びするには浅すぎるし、水も冷たすぎる。」

ギバは一人ごちた。それに陰樹林におおわれた山は十分に涼しい。遠くて蟬の鳴き声がする。川の水がさらさらと音をたてる。それがより一層山の静けさを際立たせて



ている。ギバはうつとりとして目を閉じた。足がぱしゃぱしゃと川の水をはねる音が心地良く耳に響く……。

不意にギバは蟬の鳴き声が止まってしまった事に気付いた。数千匹はいる蟬が一斉に押し黙ってしまうなんて、ギバは急に不吉な悪いに捕われた。次の瞬間、全身が硬直した。

それは声だった。よくは聞きとれないが明らかに言語ではない。しかしそれ自体が一つの意志を持つ声。

ギバは耳をすました。声は近づいてくる。

グル・ログル・ル・クウズリー・タムトガ・ハスチャ
ル・アイ・アイ・ガンノア・ヤノスゴ・エル・ガンノア
ユグゴース……

声を明瞭に聞きとれるようになった時、ギバの体は硬直から解けていた。あわてて川下へ向って走りだす。ばちやばちと川が耳触りな音をたてる。

なぜだかわからないが、その声を聞いた時、ギバの心から強い嫌悪感がわきあがってきた。

だれかが逃げろ！と頭の中で怒鳴ったような気がする。とにかくギバは走った。

気がつくときギバは犬岩の前にいた。どこをどう走ったのかは記憶にない。息切れがして頭がくらくらする。

犬岩があたしを見ている。ギバはぼんやりとそう思った。犬岩が強く、頼りがいのあるものに見えてきた。

ギバは犬岩の足下に座ってあえいだ。やがて息が整うと、ころりと体をころがせてそのまま眠ってしまった。

山岳宗教の異端教典に『弟弥杜王蔵教』というものがある。その内容のあまりの異常さにその大部分が焚書とされたが、今日まで少数の写本が残っていると言われる。

『弟弥杜王蔵教』に我祖乃蛙という魔物の事が詳しく記された項がある。それによると我祖乃蛙とその一族は遙か古より生きており、仕える者には不死を与えるという。現在、我祖乃蛙は日本の何処かに封じられており、その封印を解いた者は我祖乃蛙を自由に擇ぶ事が出来る

とも教典は伝えている。

エル・ガンノア・ユグゴース・スウルル・フグ・ウグ
イアアー・ナフグ

男は我祖乃蛙に対して呼びかけるべく、招喚の呪文を唱えた。無論、封印を破らねば我祖乃蛙は現れるはずも無かったが、少なくとも答えてはくれる筈だ。そしてその声をたどって封印を見つけ、破壊するのだ。

“一つ気がかりなのは、呪文を唱えているところを誰かに見られた事だが。”

男が考えていると、不意に鮮やかな幻が心の中に浮かび上がった。それは山火事で焼け野原になった山の一角で、人間一人位なら棄に入り込めそうな穴がぽっかり開いていた。

“あそこだ！”

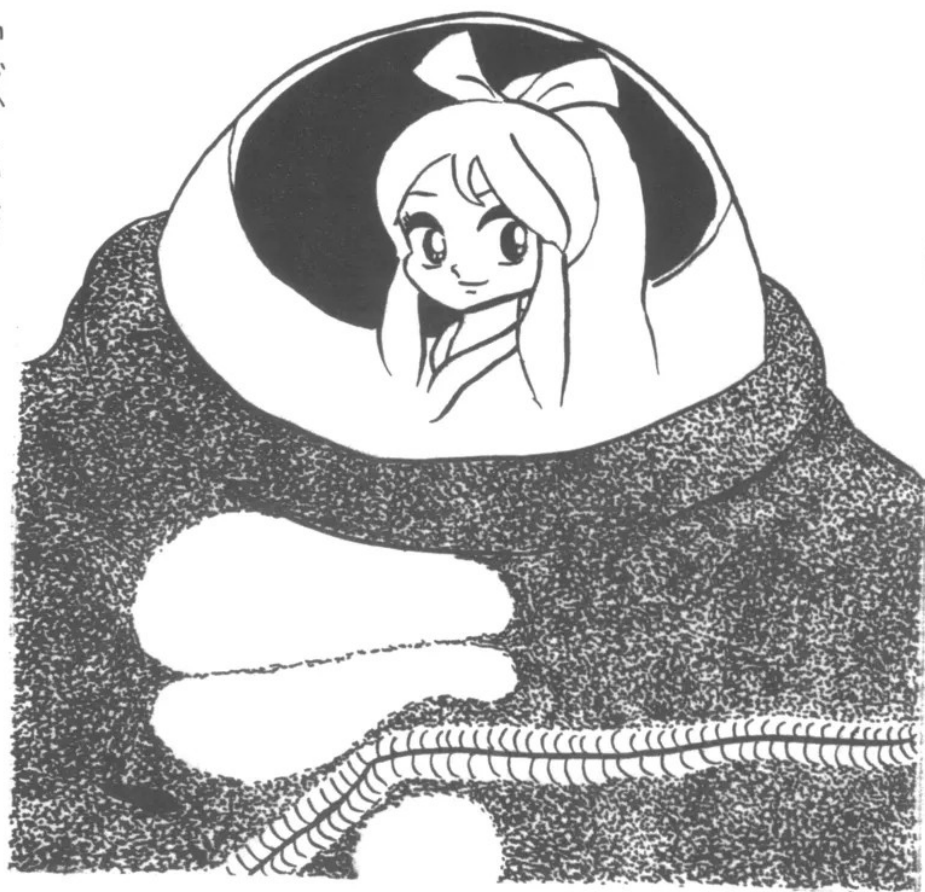
男は導かれるままに走った。

「あれ？」

目が覚めた時、最初にギバの目に写ったのは、犬岩の下顎の部分だった。いつの間にか犬岩の下にもぐりこんでしまったらしい。

「ん……」

犬岩の下から出ようとするとピンと引っばるものがある。見てみると着物の一部が犬岩の前足の下敷きになっている。



「おかしいな？」

ギバはすそを引っばってみたが抜ける様子がない。
「もうっ！」

仕方なくギバは着物のすそをひきちぎった。ちぎった跡を気にしながら、ギバは犬岩に向かって悪態をついて里の方へと歩いていった。

おかげで後に残された犬岩が困ったように、ううう…
とうなるのはギバの耳には入らなかった。

松明に照らされた壁には奇怪な彫刻が彫りこまれ、洞窟の中の空気はすえたような臭いを漂わせていた。下に向かって降りはじめた既に一刻はたっている筈だ。この洞窟は一体どこまで続くのだろう。

男は不安に駆られ始めていた。本当にここを…
「よく来た！」

だし抜けに男の頭の中に声のはじけた。男はうっと呻いてよろけた。松明を落としてしまいそうになる。

「おお、これはすまん、これくらいで良からう。早く封印を破ってくれ」

声のボリュウムは下がり、男に親しげな調子で話かけた。男は心の中に映しだされる幻像を頼りに逆三角形の中に彫りこまれた星形の封印を削り取っていく。

「よし、呪文を唱えてくれ」

ラク・シンク・ロト・イナフール・ペト・ログル・ログル・ル・クウズリー・タムトが・ハスチャル…

不意に男の唱える呪文が止まった。男の顔が恐怖にひきつり、全身が小刻みに震えだす。

「そ…そんな、そんな、ア、アンマ…、ア、ア、ア…」

男の表情が不意に喜びに満ちた表情に変わった。

ア…あ…あい！あい！あい！がそのあやのすぐ…ぬる。がそのあ！ゆぐごーす…すうるる…ふぐ…うぐ！いああ…なふぐ！

後半の呪文は絶叫になった。呪文を唱えるうちに男の

肉体には見るもおどましい退化が起こった。

たぐる・とーと・いんぷ・がそのあ……

そう、もはやそれは彼の男ではなかった。

ここを出るぞ！くふあやく、よくも閉じこめてくれたな、る・いあー！お前らの、一番大事にしている宝を奪ってやるぞ。ぶるぐ・ぶくるとむ・けむ・やーご・がそのあ！！

我祖乃蛙は封印より脱出した。

それは異様な光景だった。

山が一瞬、膨らんだかのように見え、それが山鳥たちが一斉に飛びたつたための錯覚だと知ったとき、里人たちは皆一様に家にこもって、それが何を意味するのかを不安気に考えるのだった。

そこにあったのは四つの小さなくぼみだけだった。

「どこに行っちゃったんだろ。」

ギバは首をかしげた。里人が持つていくわけないし、盗人が盗むとも思えない。

とにかく、犬岩が忽然と消えてしまったのだ。

「頂上かな……」

里人の噂を思い出してギバは呟いた。

我祖乃蛙は痼癪を起こしていた。木霊たちが枝を伸ばして、彼の行く手を防衛し続けたからだ。

くふ・ぎあー！！

絶叫と共に衝激波が四方に発せられた。枝は軽々と吹き飛び、我祖乃蛙の回りの木の中にへし折れてしまった。根こそぎになってしまった木が続々と出た。

我祖乃蛙は走り出した。今度は邪魔が入らなかった。

社はひどい有様だった。音を聞きつけて神主がやってきた時にはもう扉は破られる、柱はへし折れる、屋根は傾く、といった状態で、中に入ってみると神体は何者かによって盗み出されていた後だった。

我祖乃蛙はギバがその視界に入ってきたとたん、地面に伏せてそのままびくりとも動かなくなった。

間違いない。あれだ。七百年前、あれを殺したおかげでわしは地下一里余りもの穴ぐらに押しこまれるはめになった。ほう！この前のより幾らか粒が良いわ。磨き屋の腕がいくらか上がったようだ。

そんなことを考えながらも我祖乃蛙は気配を完全に消していた。ギバがそれに気付くわけもない。

不意に足首を捕まえられて、自分の足首を握りしめているものの姿を見つけて悲鳴をあげた時には、ギバが逃げ出すには遅すぎた。

我祖乃蛙は蛙を可能な限り人間の姿に近づけた姿をしているが、蛙の特徴も当然備えている。その水かきのあ

る手がギバの肩を抱いて引き寄せた。心臓がドキンとはねる。

”悲鳴を上げて構わんぞ“

我祖乃蛙の思考波がギバの頭の中で皮肉っぽく響いた。少なくとも今すぐ殺してしまおうとは考えていないようだ。そうとわかると、ギバの心にいくらかゆとりが出てくる。

”呆れたものだ“

我祖乃蛙が戸惑ったような思考波をだした。

”宝石は誰にでも同じ輝きを見せるものよ“

今度は感心したような思考波だ。が、

”宝石!?”

ギバがびっくりしたような声をあげたのを見て、

”しめた“

と思った思考は外に漏らさなかった。そして、

”知らんのか“

いかにも驚いたような思考波をギバに投げかける。

”知らない……“

ギバは答えた。語尾が震えている。

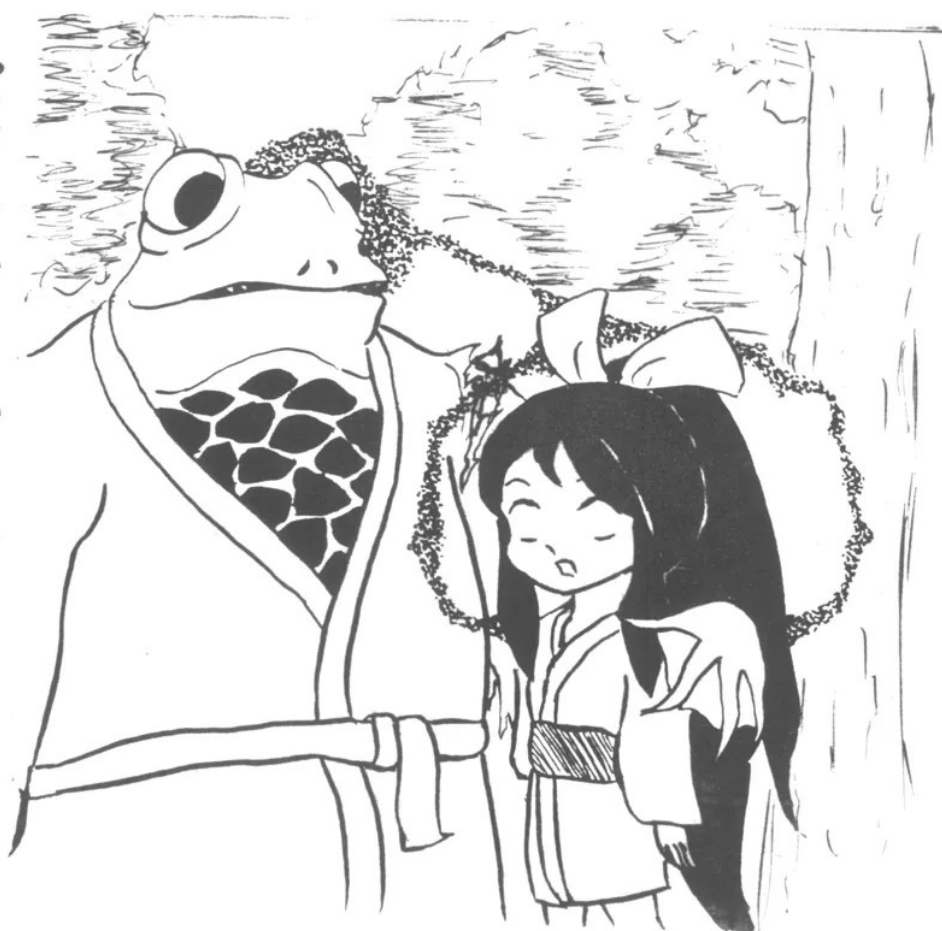
”そうか、お前は孤児か“

我祖乃蛙の思考波がそう呟いた。ギバの表層思考を読んだらしい。

”教えてやろう。お前の親兄弟は殺されたのだ“

”ええ!?”

一体誰が、とギバは思った。



”お前を今まで磨きあげ、わしを七百年の間地下に封じこめていた奴らよ“

鬘髪を入れずに疑問が飛ぶ。

”なぜ……そんなことを……“

”それはお前という宝石を磨くためには家族というものが邪魔でしかないからよ“

思考波が高らか(??)に宣言する。

”やめてえ!“

ギバは我祖乃蛙の手を振り払って身をよじり、叫んだ。

目に涙が浮んでいる。

“すまん”

我祖乃蛙の思念波がふいに過ちをとがめられた少年がとまどうようなそれに変わった。その調子の変化にギバは戸惑い、張りめぐらせていた心の警戒が一瞬、緩んだ。ギバの心に我祖乃蛙の意識が襲いかかった。ギバの心を我祖乃蛙の意識がすっぽりと覆ったのだ。

“やった！奪ってやったぞ！”

我祖乃蛙は歓喜した。ギバをこうして捕えておけば、奴らは自分に手を出せないのがわかっていた。後は奴らにどうおれをしてやるか、だ。

今は自分のものになった宝石を誇らしげに抱き寄せる。いつまでもここに止まっていられることもない。自分に有利なところに一旦退いて……

跳躍しようとした瞬間、我祖乃蛙は驚愕し、これを呪った。

結界が張られているのだ。

いつの間にな……？いや、やはり……

認めたくは無かった。ほんの一瞬と言えども、ギバに心を奪われて警戒を解いていたことを。

結界の中心には石の形より解き放たれ、全身を忿怒に覆わせた山犬が身構えている。

我祖乃蛙はギバの喉元に爪を当てた。山犬の口から口惜しげなうなりが漏れる。

なるほどな……奴ら飽きもせず……、執中するわけ

よの。

我祖乃蛙はギバを放し、その心からも撤退した。目の前にいる敵には全力を注いで戦わねばならない。片手間のままで勝てる相手ではない。

ギバは心にのしかかっていた圧力が消えて、目の前を漂う霧が晴れていくように感じた。

その視界に最初に飛びこんできたものは、二匹の獣が互いに相手の喉を引き裂こうとしている姿だった。どちらもギバにはなじみのもの。



「犬岩、それに……」

我祖乃蛙は追いつめられていた。結果は予想以上に彼
の力を奪っている。山犬の頭を打ち砕くようにして振り上
げた手が小枝にひっかかり、そのコマ何秒かの隙をつ
いて山犬は我祖乃蛙の喉を咬み裂いた。

我祖乃蛙は鮮血を噴き出し、きりきりと回転して地面
に倒れた。その瞬間、声が響いた。

「全てを許せ！さもなければ消えてゆく光を止めておく
ことは出来ぬぞ」

死に際の我祖乃蛙が発した最後の思念波だった。

それは環状列石だった。ギバは山犬に促されて前進し、
石の一つに手をあてた。

「良く来た。おおギバ、手を放してはだめだ」

ギバは手を放さなかった。

「聞くが良い、愛し児よ」

愛し児!? ギバは混乱した。石が話しかけて来るという
だけでも驚くには充分なのだ。

「驚くことはない、この石は私の寄りましなのだ。さ
あギバ、好きなことを聞くが良い。お前に対して、私
は何も偽らぬ」

「あたしは何者なのか、教えて……」

「声」はしばらく沈黙した。

「七百年前、一人の幼な児がこの山に捨てられていた。
それがお前だ。私は丹精こめてお前を育てた。気づか

れぬようにな。だがお前は殺された。今もって思い出
すのは辛いことだ。怒り狂った私は、お前を殺した蛙
をズタズタに引き裂き、地下に封じこめた。

「お前を蘇えらせるために肉体を再生するのは簡単だ
が、お前の魂はもう遙かかなた。苦勞したぞ、お前の
魂を取り戻すには」

言葉にするとこれだけだが、ギバの頭の中に流れこん
できた声には生々しい映像が伴っていた。小山のよう
な我祖乃蛙。冥界の恐しい眺め。転生したギバの姿。

「犬岩は私の寄りましの一つだ。お前のよく遊んだ鎮
守の杜には蛙を押さえこむ護符を隠しておいた。あの
蛙め！お前にそんなことを吹きこんだのか」

不意に声は怒気を帯びた。その様子の変化の急激さに
ギバはくすりと笑った。ギバはその超絶的な存在を心の
中に受け入れたのだ。

「お父さん(?)……」

ギバの唇からその言葉が出た時、「声」は歓喜にうち
震えた。

「最後に一つ聞きたいことがあるの」

ギバが言うより早く、「声」はそれを察した。

「あの蛙がお前のことを宝石と呼んだ理由か。あれは
私が石にしか寄りましますことが出来ないのを知ってお
てな。お前をそう呼んだのは、奴の私に対する嫌味な
のだ」

編集後記

無能であつた……

ゆみむらりく氏ごめんなさい。

清書を一番多く(半分も)やっても
らつてしまった。

白坂氏にもめいわくかけたし、

あおき氏にもめいわくかけたし、

たしか……あの人にも……

とにかく無能であつた。

清書にあんなに時間くうなんて……

米塚進也♡

これが……無能!

P.S

無能であつても不能ではありません!
せん!

— おくづけ —

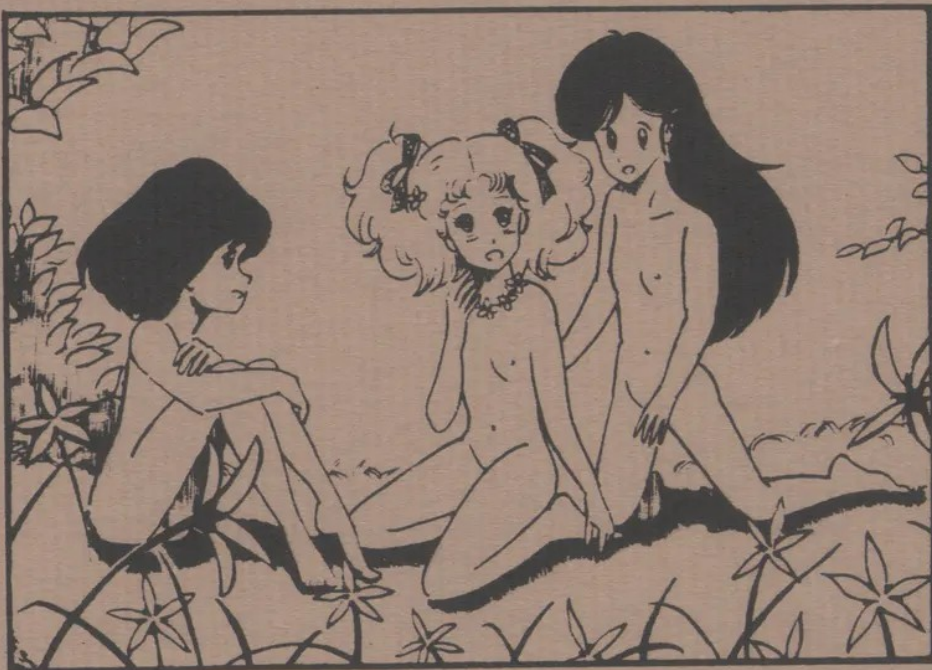
HUMBERT NOVELS

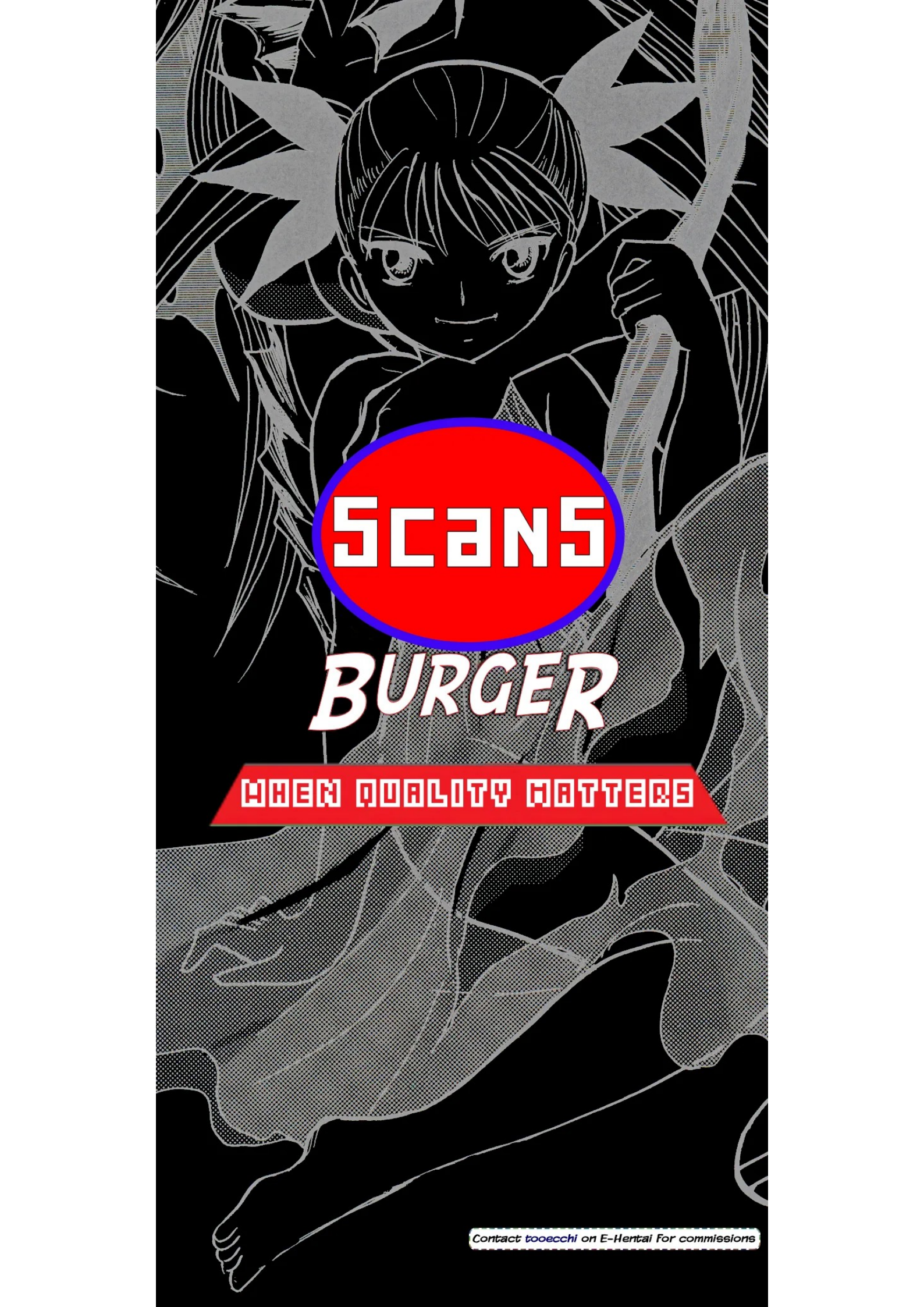
- 発行
ハンバート
- 発行日
57年8月8日
- 印刷
K, P, C
- 代表
白坂一美

〒211

川崎市中原区上小田中1089







SCANS

BURGER

WHEN QUALITY MATTERS

Contact [toocchi](#) on E-Hentai For commissions